

対話 AI

対話 AI 企業手探り

会議録の要約検討

顧客相談は尚早

山梨県内の企業で、対話型人工知能（AI）「チャットGPT」を業務に導入することを検討する動きが広がっている。「効率化や省力化が期待できる」と、会議録の要約などでの使用を模索する企業もある一方、正確性や信頼性、外部流出などのリスクを考慮し、顧客対応などの用途には「時期尚早」との見方も。企業の担当者からは、使用に当たっての指針が不可欠との声も上がるが、「明確な線引きが難しく、策定にはある程度の時間が必要」との声が根強い。

〈山本就己〉

県内 外部流出に懸念

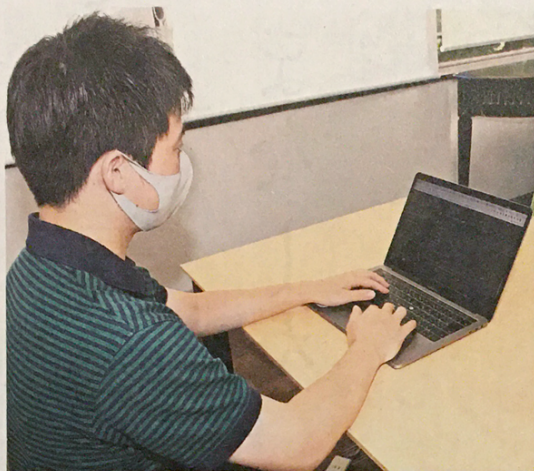
「以下の文章を簡潔にまとめてください」「あなたは優秀な議事録作成者です」。7月初旬、紙製品製造を手がける「マルアイ」（市川三郷町）の経営企画部長村松幸樹さん（33）がノートパソコンのキーボードで、チャットGPTへの指示を打ち込んだ。数十秒後、画面上に簡潔書きされた

「以下の文章を簡潔にまとめてください」「あなたは優秀な議事録作成者です」。7月初旬、紙製品製造を手がける「マルアイ」（市川三郷町）の経営企画部長村松幸樹さん（33）がノートパソコンのキーボードで、チャットGPTへの指示を打ち込んだ。数十秒後、画面上に簡潔書きされた

文章の一覧が表示された。マルアイは将来的な業務への導入を見据え、活用できる分野を見極めるために今年から研究に着手している。村松さんは「専門用語が出てきた時には情報の精度が落ちるケースも見られる」と指摘。「チャットGPTの」知識に頼るというより、議事録の要約な

ど事務作業を効率化するツールとしての活用が現実的ではないか」とみる。

情報通信サービス業のフォネットワークグループ（甲府市）も、情報の精度に懸念を抱いている。窓口やインターネット上で顧客の相談に応じる業務への活用を例に挙げ、「事実と異なる情報が出ればトラブルにもつながりかねない。責任の所在もあいまいだ」と説明。メリットとデメリットの丁寧な検証が不可欠といい、担当者は「期待は大きいですが、実用化はまだ先になる」と見通しを語った。



チャットGPTを試験的に利用するマルアイの村松幸樹さん。情報の精度の不安を指摘する 〓市川三郷町市川大門

穀物食品製造の「はぐく」（中央市）は社内のIT部門で導入の検討作業を始め、活用事例など情報収集を進めている。業務の省力化につながる期待はあるものの、「個人情報など機密情報が外部に流出してしまう可能性も指摘されている。会社の信用問題に直結するリスクだ」と不安を